

幼児期の運動発達を促す身体的表現運動に関する一考察

A Consideration on Physical Expressions for
Supporting Physical Movements Development of
Pre-School Children

瀬谷 元子
M o t o k o S E Y A

目 次

1. はじめに	3
2. 子どもの運動発達過程について	5
(1) これまでの運動発達研究について	
(2) 運動課題の達成度からみる幼児期の運動能力	
(3) 合否判定テスト分析	
3. 幼児期の身体表現運動の特性について	8
(1) 表現とは	
(2) 幼児（3，4，5歳児）期の身体表現運動の特性について	
4. 身体表現運動における運動課題設定についての手掛かり	9
(1) リトミックおよび身体表現運動に使用・表出される運動要素の抽出	
①リトミック	
②身体的表現運動	
(2) 合否判定テスト項目と表現の特性にみる3，4，5歳児の運動特性について	
5. 結語	14

1. はじめに

幼児期の保育に携わる人々は、身体的表現運動が幼児の心身の順調な発育、発達にとり重要なものであることを経験的に認識している。ある時期に身体的運動発達が著しい幼児が、言語的にも同時に伸びをみせる事例に出会うこともしばしばであろう。この相互の関連性について科学的な検証を得られなくとも、また、(仮に検証されたとして) 検証された事実を知っても知らなくとも、保育者は、日常の保育活動の中で、運動の重要性を感じている。そして、幼児の順調な発育、発達を願っている。

さて、一方で、子どもの発達不全、体のおかしさが、保育現場や学校教育現場などでいわれて久しい。指導者が集団のおよび歴史的に見て、“どこかおかしい”と実感されるような現象が1960年代から見られはじめ、1970年代になって子どもの体の変化が実感されるようになる。このような背景から、1990年代になって「子どものからだと心白書」が作られるようになった。

正木らは、「子どもの“からだのおかしさ”についての実感調査を先行させながら、その実体は何かということを追いかけてきたが、それは、“からだの不調”と“からだの発達不全”そして“それらの複合”である、ということをはっきりとすることができた」と考えている²⁾。しかも、それらは「疾病・異常」ではないが、さりとてとても「正常」とはいえないようなことで、それらの間の問題であった。上記の正木らの研究では、「からだの発達不全」については、次のような神経系の発達不全 (developmental disorders) を明らかにしてきた。

- ア 大脳新皮質・前頭葉の活動の強さの発達不全
- イ 筋肉感覚や立位視機能など感覚機能の発達不全
- ウ 自律神経系の発達不全
- エ 体温調節機能の発達不全

このような発育、発達が順調でないという事実は、今後の少子化社会において社会を支えるべき次世代において身体的にも精神的にもひ弱な人間が増加し、疾病による医療費の増大などの社会負担増を招き、次世代の人々が日本の社会を支えられないのではないか(支える意欲も失われ、社会システムが崩壊するのではないか)という危惧も抱かせるものである。統一した見解は得られていないのではあるが、「行動体力」や「防衛体力」の低下が健全な成長を妨げている事実は、適切な発育、発達に対する支援が急務であることを示している。

それでは、順調な発育、発達に対する支援を、保育現場のどのような活動の中で実施したらよいのだろうか。

小林の最近の研究³⁾は、これらについて、示唆に富む材料を提供してくれる。

たとえば、

- 子どもは6歳を過ぎる頃から、幅6cmの狭い歩行板の上を後ろ向きに歩けるようになる。この幅の狭い、限られた範囲を後ろ向きに歩くことができるということは、バランス機能と、

前後左右や方向に関わる「身体図式」の発達が順調であることを示している。身体協応検査に、この歩行坂での後ろ歩きを取り入れれば、動きのぎこちない子どもをある程度チェックできることがわかった。

○子どもは、6、7歳頃までに身体の左右性と方向性がほぼ確立し、大人と同じような身体意識を備え、複雑な運動ができる。

○子どもが身体の前後、左右、遠近など様々な方向を意識した歩き方ができたり、“ゆっくり”や“速く”の時間を意識した動作ができるのは、身体意識が発達し、その延長としての「時間・空間意識」が発達している場合である。つまり、自分の身体はどの様になっていて、それは空間のどの位置にあり、どのように動けば広がりのある環境に上手に適応できるかという時空間意識が発達していることで初めて可能となる。この発達の力があるとき、「複合応用運動」が育っていることになり、背中に目があるかのような後ろ歩きができるなどである。

上記にみられるように、小学校入学（6、7歳）以前の3、4、5歳の幼児期はこれらの能力を獲得する基本となる大変重要な時期であることがわかるのである。この時期に発育・発達を適切に支援し、より健全な身体、精神の形成を導くことは、少子化時代の幼児教育の柱と考えられ、結果として将来の社会的負担を大きく減らすことにもなるものと考えられる。

さて、幼児教育においては、造形的表現、音楽的表現、身体的表現などの表現活動が幼児の身体的機能や運動機能を発達させ、認知や思考の力を伸ばし、社会性を育てるといわれており、保育現場ではこれらの表現活動が、有機的、総合的に実施されている。そして、これらの三領域の分野は相互関係が深いために、幼児期では特に、個別に実施されるよりも、複合的、同時的に実施されている場合が多い。例えば、あるテーマに沿って「つくって・うたって・あそぼう」という具合にである。これまでの身体的表現運動の研究においては、表現の素材やテーマに対して、単に、どの様な表現運動が展開されたかを考察し言及しているものが多い。このような中で、逆に、身体的表現の中でより多くの意識した運動が展開されるであろう課題を、保育者が意識的に与え、「楽しみながら、(内発・自発的に)表現運動を行わせることができ、その結果、身体的発達を促すことができる」ならば、幼児にとっては一つの望ましい教育現場になるのではないか。

(以上のような観点から)本研究は、

○幼児の身体的発達過程を踏まえた運動を運動能力テスト(2.(2)参照)項目より抽出し、

○身体的表現活動領域において、発達を促すことができ、楽しく表現体になれる運動テーマを検討する

ことによって、順調な発育、発達が成し遂げられる一つの発達支援方法(発達支援身体表現運動)を考察するものである。

2. 子どもの発達過程について

(1) これまでの運動発達研究について

〔(1)については、森下の研究⁹⁾から引用する。〕

運動発達に関しては多くの研究があるが、おおよそ以下のように大別される。

- ア 動作様式や反応様式がどう推移するか（乳児の運動反射の消長，操作や，移動運動の発現時期をみるもの）
- イ 運動課題の達成度がどう推移するか（達成値を基準スコアに換算する方法，運動の出来高をみる体力検査的な方法など）
- ウ 運動発達が何によって規定されるか（生理学的・運動学的・力学的メカニズムをみるもの，遺伝・成熟・環境・学習などの影響をみるものなど）
- エ 運動系と他の発達系がどうかかわるか（認知，身体意識，障害との関連をみる）
など

運動発達は，外からよくみえること，その順序性，発現の時期にかなり規則性があることなどから，古くから〔子ども階梯〕や通過儀礼の指標とされたり，児童研究の初期から発達過程が報告されてきた。研究方法は，月齢や年齢という時間軸にそって動作や反応様式（運動性反射の消長，姿勢・移動・操作を含む）の出現年齢を記述し，多数例を処理してその基準月齢をつくるもので，この方法による発達研究は現在も広く用いられている。また，発達検査の原法にあたるものは，すでに1930年代に刊行されている。検査の目的は，個々の子どもの発達レベルの把握，発達障害や異常の早期発見とスクリーニング，発達支援の処方とその効果の判定などで，19世紀後半以降の公教育の普及もその引き金になった。

このうち，探索・操作（微細運動，小筋運動，fine motorともいわれる）系のものは，提示された玩具との距離や方向，対象の形や重さといった認知と関わりが深いため，認知系の発達の手掛かりとされることが多く，一方，姿勢・移動運動（粗大運動，大筋運動，gross motorともいわれる）系のものは，独立性が高いとされてきた。幼少期の運動発達は，他の発達系からの独立性と神経系成熟の優位性が特徴とされてきた。したがって，教育的支援も，「あらかじめ乳児の身体に組み込まれた筋書きを，順序よく展開させることが優先する」といわれている。

(2) 運動過程の達成度からみる幼児期の運動能力

〔(2)については，郷司らの研究⁹⁾を引用する。〕

幼児期の運動能力の発達は，多様な運動パターンの安定化，効率化にあり，質的な発達が主要な部分を占めている。幼児の運動成就の特徴は，いかに安全に，安定した状態で，いかに多くの運動パターンを成就できるかにある。この発達の観点に基づく運動能力の測定が研究分野を中心に広く行われている。そして，これまで乳幼児を対象に，運動パターンができるか否か，あるい

は運動パフォーマンスが一定の基準に達しているか否かを合否判定する運動能力テスト（以下、「合否判定テスト」という）が多数、研究、開発されてきている（Bayley, 1969; Charlop and Atwell, 1980; Frankenburg et al., 1971; Silra and Ross, 1980）。

合否判定テストは、日常の運動遊びにみられる運動パターンが多く採用され、動機付けが比較的容易で、必ずしも最大能力発揮を必要としない利点がある。テストに対する興味、関心が低く、集中力の持続も十分できない幼児の心理的特徴を考慮すると、より適したテストであると考えられる。

以下の論を展開するにあたり、合否判定テスト結果が必要であるので（郷司らの研究⁹⁾より）表1に引用する。この表からもわかるように、一般に幼児期の運動能力は、質的および量的の両側面において、加齢とともに発達する（金・松浦, 1988; 宮丸, 1973; Wickstrom, 1975）。運動能力発達における加齢の影響は大きく、運動能力は加齢の影響を含めて扱うことが適当であると考えられる。

〔テスト項目から、身体的表現運動に利用できる項目についての考察〕

以下の表において、○印をつけた運動については、筆者が合否判定テスト項目で、身体的表現運動の中で使用することが可能で体力をつけるのに有効であると判断した運動である。

移動型	操作型	安定型
○①バーくぐり抜け	⑮テニスボール投げ	○⑳こままわり
○②後方歩き	○⑯ドッジボール投げ	○㉑片足立ち
○③平均台上速歩き	⑰ドッジボール的当て	○㉒両足爪先立ち
○④180度方向転換	○⑱まりつき	⑳テニスボール避け
⑤なわとび	⑲ドッジボール転がし	
⑥両足跳び越し	⑳ドッジボール受け	
○⑦幅跳び	㉑テニスボール受け	
○⑧片足連続跳び		
○⑨片足後方跳び		
○⑩片足往復左右跳び		
○⑪ギャロップ		
○⑫スキップ		
⑬のぼり棒登り		
⑭台上登り		

表1 合否判断テスト項目, 判定基準および実測による合格率

テスト項目	合格基準	合格率 (%)		
		3歳	4歳	5歳
1. バーくぐり抜け	高さ40cmのバーの下をよつんばいで膝を下につけないでくぐり抜けられる	38	56	90
2. 後方歩き	幅2cmの線に沿って後ろ向きに真っ直ぐ歩ける	31	72	94
3. 平均台上速歩き	平均台上の1mの距離を2秒以内に渡れる	81	97	100
4. 180度方向転換	その場両足跳びで, 180度以上方向転換できる	56	77	97
5. なわとび	縄跳びを3回以上連続して跳べる	0	23	56
6. 両足跳び越し	高さ40cmのバーを両足で跳び越せる	0	60	90
7. 幅跳び	立ち幅跳びで80cm以上跳べる	44	84	90
8. 片足連続跳び	片足跳びで2m以上進める	67	97	96
9. 片足後方跳び	片足で後方へ10cm以上跳べる	0	41	72
10. 片足往復左右跳び	片足で左右への往復跳びが2往復以上続けられる	0	31	81
11. ギャロップ	ギャロップで2m以上進める	57	60	85
12. スキップ	スキップで2m以上進める	50	66	90
13. のぼり棒登り	のぼり棒登りを1m以上登れる	12	26	97
14. 台上登り	高さ80cmの台上に登れる	33	91	100
15. テニスボール投げ	テニスボールを片手で上から5m以上投げられる	0	31	79
16. ドッジボール投げ	ドッジボールを両手で下から3m以上投げられる	18	48	97
17. ドッジボール的当て	ドッジボールを両手で下から投げ, 直径80cmの的に当てられる	39	79	90
18. まりつき	ドッジボールを3回以上連続してつける	0	14	52
19. ドッジボール転がし	ドッジボールを両手で転がし, 3m離れたビール瓶に当てられる	24	41	64
20. ドッジボール受け	2m上から落とされたドッジボールを受け取れる	59	88	93
21. テニスボール受け	自分で落として弾んだテニスボールを手のひらのみで受け取れる	5	43	90
22. こままわり	こまのように片足を軸にして1回転できる	39	64	83
23. 片足立ち	片足立ちを3秒以上保持できる	56	89	100
24. 両足爪先立ち	両足爪先立ちを3秒以上保持できる	45	89	100
25. 前転	前転を2回以上連続してできる	67	83	100
26. テニスボール避け	3m手前から胸に向けて軽く投げられたテニスボールを避けられる	50	68	94

3. 幼児期の身体表現運動の特性について

(1) 表現とは

〔(1)については、松本の研究⁹⁾および金子らの研究¹⁰⁾を引用する。〕

松本は、「表現は、一般的には、内にあるものを外にあらわし示すこと、内にあるものを伝達するために外にあらわされた形と解されている。具体的には、言語表現、絵画表現、造形表現、音楽表現など、ある素材をもつての送り手と受け手のコミュニケーションであり、対象の直観的、感情的形成の行動とその形成結果であるとみられよう。身体表現、運動表現と呼ばれる領域も同様の特質をもち、“身体”という“生きた人間存在”をもつて、美と情動の発信と享受、その相互交通を保証し、人間を活性化する特性と意義を備えている。その身体表現が、第一に獲得したのは、歩行の力とリズムの変形であり、同時に音楽と融合しての視・聴覚と運動感覚との統合であった。」と述べている。

また、金子は、「身体表現で取り組まれる、全身を用いた動きを行う活動は、幼児の活動欲求を満足させる一方で、より進んだ身体支配を要求するので、幼児の身体支配能力を開発することができる。また興味ある対象から動きを創り出してゆく活動は、豊かな感受性や柔軟な思考の力を必要とするので、これらの力を伸ばすことができる。加えて、仲間と協調して遊ぶことができたり、一人ではできないイメージを表現するために、協同的な技能が要求されるので、社会性の育成に深く関わっている。このことは、身体支配や豊かな感受性や柔軟な思考、社会性が開発されることによって、幼児がより豊かな身体表現活動を展開することができるようになるのである。」と述べている。

(2) 幼児（3，4，5歳児）期の身体的表現運動について

幼児の身体的表現的見地からの発達について述べる。〔(2)については、金子らの研究¹⁰⁾を引用する。〕

幼児の身体支配に関する研究では、5歳児は3，4歳児に比べ、違った動きのパターンを正確に体感し、身体意識がはっきりしていることが示されている。若松は「幼児の身体的表現力は、4－5歳にかけて急速に発達することを指摘し、4歳児初期の段階までは表現体になりきることが難しく、動きの工夫も単純で、個人で表現していることが多いが、4歳中頃から、複合的な動きや全身的な動きが見られ、数人で関わり合いを持ちながら表現していく様子が見られるようになる」と報告している。

5歳児の身体表現の特徴および運動能力、創造的能力との関係について、次のような結果が報告されている。

「5歳児にとって多様な動きを用いたり、いろいろなことを表現することは獲得されやすいが、細部にまでよく思考したり、具体的に表現することは、難度の高い表現方法であることが示唆さ

れた。運動能力と創造的能力とが十分に獲得されている場合に、最も充実した身体的表現が可能となる。そして、運動能力が上位の場合は創造的能力が身体表現の充実に生かされるが、運動能力が下位の場合は、創造的能力が上位にあっても身体表現への影響が現れにくいことが示唆された。」

上記より、身体表現においても創造的能力を生かすためには、よりすぐれた運動能力が必要とされるのである。

4. 身体表現運動における運動課題設定についての手掛かり

(1) リトミックおよび身体表現運動に使用・表出される運動要素の抽出

1) リトミック

幼児の身体的表現について考えるとき、「リトミック」⁷⁾⁸⁾について簡単に述べる必要があると思う。(詳細については、別の機会に研究考察を試みたいと思う。)日本の幼児教育現場では、リトミックは、スイスの作曲・音楽教育家であったエミール・ジャック＝ダルクローズ(1865-1950)によって創案、体系化されたもので、音楽と動きを融合させた教育であり、今日では、音楽教育はもちろん、ダンス、体育教育、障害児教育など、多くの分野で応用されていることはよく知られている。そして保育現場で多く実践されている。

筆者は、ダルクローズの創案したシステムは、「子ども達の自然な動きが、そのまま基本のリズムになり」、「歩いたり、走ったり、跳んだり」の運動が音楽的に整理され、音楽的リズムとして系統的に組み立てられている。(それゆえ)リトミックは、その発生からみて、音楽的表現であると同時に、身体的表現運動的であると考えている。

今回は、リトミックの保育現場で使用されている「リトミックコーナー」指導書⁹⁾を選定し、以下に、その教科書において使用されている運動要素を簡単に抽出する。

- ① 歩く
- ② 走る
- ③ スキップ
- ④ いくつかのステップ
- ⑤ ジャンプ
- ⑥ 方向転換
- ⑦ 転がる
- ⑧ 前転
- ⑨ 体の部位を意識する運動(頭、肩など)
- ⑩ 腕を上下に動かす運動
- ⑪ 身体の空間感覚を意識した運動

ここに運動要素のみ抽出したが、リトミックにおいては、「リトミックの教育効果のひとつは、音楽と動きを結びつけることによって、『心身の一致、調和』を図ることにあり、そのことによって集中力、即時性、注意力、観察力、判断力、反応力、想像力、創造力などの能力を高める」全人成長のための音楽教育方法であることを誤解のないように補足しておく。

2) 身体表現にみられる運動要素について

次に幼児期の身体表現をとりあげた先行研究の中から、その題材と、表現された運動要素について簡単に抽出する。

題材（本山らの研究¹⁰より）

- | | | | |
|---------|-----|--------------|-------|
| (1) 花 | ・ ・ | 手首を合わせて指先を開く | (47%) |
| (2) 鳥 | ・ ・ | はばたく | (79%) |
| (3) 汽車 | ・ ・ | 腕で車輪をつくる | (54%) |
| (4) うさぎ | ・ ・ | 両手で耳をつくる | (82%) |
| | | 両足跳び | (81%) |
| (5) こま | ・ ・ | 回る | (61%) |
| (6) ねこ | ・ ・ | はう | (54%) |

(7) 「好きな動物に変身しよう」(5歳児)

- ① 歩く
- ② 走る
- ③ ギャロップ
- ④ はう、よつばい
- ⑤ ジャンプ
- ⑥ 伸びる
- ⑦ 爪先立ち
- ⑧ 腕を回す
- ⑨ 転がる
- ⑩ 側転もどき
- ⑪ 腕を上下する

(* これらを組み合わせた、パターン化した運動が2, 3見られた)

など。

ここで特に気づくのは、運動要素の類似性である。これは、保育現場にあつては「リトミック」, 「身体表現」とともに、題材として模倣遊び（動物や動きのある乗り物等）や創造遊び、運動遊びが行われており、テーマと表出した運動についての共通性があるためであろうと考える。

この場合のリトミック表現運動に類似性が見られるのは、興味深い結果である。

(2) 合否判定テスト項目と表現の特性にみる3, 4, 5歳児の運動特性について
運動能力についての項目にみる運動能力は、合否判定テスト全項目において、加齢に伴う有為な増加傾向が認められている。

合格率50%以上の運動を年齢別にまとめると次のようになる。

3歳児

・平均台上速歩き	(81%)
・180度方向転換	(56%)
・片足連続跳び	(67%)
・ギャロップ	(57%)
・スキップ	(50%)
・ドッジボール受け	(59%)
・片足立ち	(56%)
・前転	(67%)
・テニスボール避け	(50%)

4歳児

・バーくぐり抜け	(56%)
・後方歩き	(72%)
・平均台上速歩き	(97%)
・180度方向転換	(77%)
・両足跳び越し	(60%)
・幅跳び	(84%)
・片足連続跳び	(97%)
・ギャロップ	(60%)
・スキップ	(66%)
・台上登り	(91%)
・ドッジボール的当て	(79%)
・ドッジボール受け	(88%)
・こままわり	(64%)
・片足立ち	(89%)

- ・両足爪先立ち (89%)
- ・前転 (83%)
- ・テニスボール避け (68%)

5歳児

- ・バーくぐり抜け (90%)
- ・後方歩き (94%)
- ・平均台上速歩き (100%)
- ・180度方向転換 (97%)
- ・なわとび (56%)
- ・両足跳び越し (90%)
- ・幅跳び (90%)
- ・片足連続跳び (96%)
- ・片足後方跳び (72%)
- ・片足往復左右跳び (81%)
- ・ギャロップ (85%)
- ・スキップ (90%)
- ・台上登り (97%)
- ・ドッジボール的当て (90%)
- ・ドッジボール受け (93%)
- ・こままわり (83%)
- ・片足立ち (100%)
- ・両足爪先立ち (100%)
- ・前転 (100%)
- ・テニスボール避け (94%)

次に、前述した身体表現力について年齢による特徴をまとめると次のようになる。

- ・4歳児初期（3歳児含む）の段階までは表現体になりきることが難しく、動きの工夫も単純で個人表現していることが多い。
- ・4歳中頃から複合的な動きや全身的な動きが見られ、数人で関わり合いを持ちながら表現していく様子が見られる。
- ・5歳児は、3・4歳児に比べ、違った動きのパターンを正確に体感し、身体意識がはっきり

している。

- ・ 5歳児にとっては、多様な動きを用いたり、いろいろなことを表現することは、獲得されやすいが、細部までよく思考したり、具体的に表現することや他の子どもが思いつかない表現をすることは、難しい。

最後に、筆者が発達支援の観点から適当と考える表現運動を、表現特性にみられる運動・合否判定テスト項目における50%到達度を考慮に入れてまとめたものを、表2に示す。

表2 3-5歳児の50%到達度の合否判定テスト項目と運動発達を支援する身体表現運動について(1)

	表現特性にみられる運動	合否判定テスト項目における50%到達度	発達支援の観点から適当と考えられる (リズムミクナ)身体表現運動の例 (適切なリズムカルな音楽に合わせて実施)
3 歳	(3歳-4歳初期) ・表現体になりきることが難しく、動きの工夫も単純 ・個人表現をしていることが多い	・平均台上速歩き ・180度方向転換 ・片足連続跳び ・ギャロップ ・スキップ ・ドッジボール受け ・片足立ち ・前転	1 いろいろな歩き ①クルッと向きを変える歩き ②いろいろな形の上を歩く ③後ろ歩き 2 平均台上の速歩き (ジャンプして降りる) 3 いろいろな所に走って行く・合図で止まる・好きなポーズをとる(変身遊び)・(最後に)クルッと床で前転 4 動物(例;うさぎ)になって跳ぶ (両足跳び,片足連続跳び) 5 スキップして野原に花を見にゆく・しゃがんで花をつむ 6 ギャロップで馬になる など
4 歳	(中頃) ・複合的な動きや全身的な動きが見られる ・数人で関わり合いを持ちながら表現してゆく様子が見られる	・バーくぐり抜け ・後方歩き ・平均台上速歩き ・180度方向転換 ・両足跳び越し ・幅跳び ・片足連続跳び ・ギャロップ ・スキップ ・こままわり ・片足立ち ・両足爪先立ち ・前転	7 バーをくぐる 8 わにのように四つんばいで歩く 9 アヒルのように歩く 10 トンボになって走る・止まって片足ポーズをとる 11 二人で手をつないで音楽に合わせて歩く・音楽が止まったらジャンプ 12 ボール遊び ①ボールを転がしてうけとる ②ボールを配る ③ボールを送り,ボールをつく ④ボールになる人はジャンプ 13 ふたり組になって手押し車をつくる 14 どんぐりになって転がる(運動遊び) 15 みんなで手をつないで輪をつくる ①スキップをする ②ギャロップをする ③爪先立ちになり手を上に挙げる など

表2 3-5歳児の50%到達度の合否判定テスト項目と運動発達を支援する身体表現運動について(2)

	表現特性にみられる運動	合否判定テスト項目における50%到達度	発達支援の観点から適当と考えられる(リズム的な)身体表現運動の例(適切なリズムカルな音楽に合わせて実施)
5歳	<ul style="list-style-type: none"> ・3, 4歳児に比べ, 違った動きのパターを正確に体感し, 身体意識がはっきりしている ・多様な動きを用いることができるようになる ・いろいろなことを表現することができるようになる ・細部までよく思考したり, 具体的に表現することや他の子どもが思いつかない表現をすることは難しい 	<ul style="list-style-type: none"> ・バーくぐり抜け ・後方歩き ・平均台上速歩き ・180度方向転換 ・なわとび (56%) ・両足跳び越し ・幅跳び ・片足連続跳び ・片足後方跳び ・片足往復左右跳び ・ギャロップ ・スキップ ・こままわり ・片足立ち ・両足爪先立ち ・前転 	<ul style="list-style-type: none"> 17 フープで汽車ごっこ ((いろいろな方向に) 歩く⇒走る・後ろ走り) 18 おそうじのテーマで運動 19 うさぎ・くま・りすをリズムに合わせて表現する (①ジャンプ, ②片足立ち, ③爪先立ち, の運動を工夫して入れる) 20 だるまさんになる (転んで起きる) 21 ものまね遊び (動物や乗り物のテーマを与える) 犬, 小鳥, ライオン, 馬 (ステップを工夫させたり連続したジャンプを意図的に組み入れたりする) 22 想像遊び (花を積む・散歩に行く・フライパンの上で, など) (いくつかのイメージを与え, 一連の動きの中に, リズミカルなリズム・パターンを考えさせたり, 与えたりして表現させる) <p>など</p>

5. 結語

4. において, 身体表現運動における運動課題設定に関する手掛かりについて考察してきた。

これまでは, 表現特性 (創造能力面での発達特性) および運動能力面での発達が個別に研究されてきたが, それらを年齢という視点で整理することにより, 創造能力面での発達と運動能力面での発達を, ある程度相関づけて見られるものとした。この整理により, 例えば, 保育現場で実践される身体的表現運動やリトミックにおける運動要素が, 幼児の発達面からみて, 運動能力の発達を支援するものとして適当なものであるか否かを考察できるようになる。

従来, 教師により経験的に行われてきた身体的表現運動やリトミック学習の模倣遊び (動物や動きのある乗り物など) や創造遊び, 運動遊びのテーマ選定に際し, 積極的に運動発達を促すという視点が抜けていたように思われる。

本研究の主眼は, 最初に述べたように, 少子化社会において社会を支える次世代の子どもたちの健全な体と精神を, 幼児教育段階の (楽しい) 身体的表現運動を通して如何に育むかにある。そのため, 上で整理したものを活用し, 身体的表現運動に, 積極的に運動発達を促すという視点を付け加え, 発達達成のための運動要素の学習を折り込むこととしたい。

この論文においては, この整理ができたことを報告するにとどめ, 今後, 上の点を十分に研究・検討し, 次の報告としたい。

参考文献

- 1) 正木健雄 (2000) 子どものからだの「発達不全」と「不調」; 実感されてきた“からだのおかしさ”の実体 体育学研究 45-2 P.P.267-273.
- 2) 小林芳文 (1997) 表紙解説 身体図式の発達が十分でない後ろ歩きが上手にできない 体育科教育 45-11 P.56.
- 3) 森下はるみ (1999) 幼少期における移動行動の発達 体育学研究 44-2 P.68.
- 4) 郷司文男・出村慎一・春日晃章・小林秀紹・佐藤進・南雅樹 (1999) 合否判定に基づく幼児の運動能力テストと間隔尺度に基づくテストの関係 体育学研究 44-4 P.P.345-359.
- 5) 松本千代栄 (1997) 表現と体育, そして舞踊教育 47-8 体育の科学
- 6) 金子直子・松本富子・鈴木武文 (1998) 5-6歳児における身体表現の特徴と感覚運動能力・創造的能力との関係について 舞踊学 第21号 P.P.14-20.
- 7) ヨッヘン・シュミット (1987) 1920年代のドイツ表現主義舞踊 —バウハウス・オイリュトミー・リトミックなどに関連して— 舞踊学 10-2号 P.48.
- 8) 美二三枝子他 (1999) 日本におけるドイツ舞踊の流れ 1987年シンポジウムより 舞踊学増刊号 1999年 P.103.
- 9) ダルクローズ教育法によるリトミックコーナー (1999) 板野平監修 チャイルド本社
- 10) 本山益子・西洋子 (2000) 幼児期の身体表現の特性Ⅱ—身体表現と認識との関連—舞踊学 第23号 P.62.